

2020年9月20日 司祭 越山 哲也

八戸聖ルカ教会

## 聖霊降臨後第16主日（特定20） 説教

### 「何もしないで立っている人に向けられた神の恵み」

〔旧約聖書〕 申書 3:10~4:11

〔使徒書〕 フィリピの信徒への手紙 1:21~28

〔福音書〕 マタイによる福音書 20:1~16

主の平和が皆さんと共にありますように。

昨夜もう日付けが9月20日に変わったぐらいの時間に私は今日の礼拝メッセージの準備をしていた時に、奏楽奉仕の担当になっていた妻が私に明日20日の礼拝の入堂聖歌527番についての話をしてくれました。この聖歌の背景にある悲しい事件について私は初めて知りました。ダンブレーン虐殺事件です。1996年3月13日、スコットランドのスターリング近くのダンブレーン小学校に侵入し、トーマスハミルトンが16人の子供と1人の教師を射殺し、15人が負傷しました。それはイギリスの歴史の中で最も致命的な大量射撃の事件であったそうです。

527番はこれまでも私自身は何度か礼拝で歌ったことがあり、心に響く歌詞だなとは思っていました。

1節「傷ついた人の 祈りにこたえて 信じて疑う 迷い除く恵み 十字架にかかり 傷ついたみ手でわれらの命をはげまし支える」2節「消えることのない 罪 咎の思い 見えない明日への恐れに苦しむ 愛は変わらずに 弱さに向き合い 心のいたみに いつでもよりそう」3節「助けを求めて集まる人々 救い主の手は ふれあいのうちに 身と心すべて すこやかにもどし 破れた平和を いやす聖霊よ」

以上が、527番のすべての歌詞です。我が子の命を突然奪われた親御さんの思いを想像してこの歌詞をじっくりと何度も読み直してみました。先月8月下旬に9月の礼拝聖歌を選曲した時に527番を選んだ時はこの事件の事を私はまだ知りませんでした。

本日の福音書も正直に申して私自身全くイエスの御心を感じる事が出来ずにいたのです。そんな時にダンブレーン事件のほんの概要だけを知りました。まだまだその全容を調べたわけでは全くありません。

でもまず私が思ったのは、どうしてこのような不条理なことが起きるのだろうかという事でした。

今日の福音書で選ばれている天の国のたとえなし「ぶどう園の労働者」は私たちの常識から考えれ

ば全く理解不能な非常識話のように感じる話です。

朝早くから暑い中夕方まで一生懸命働いた人、終業時間直前の夕方5時に雇われてぶどう園で働いた人に日当賃金として同じ1デナリオンが支払われました。こんな事は普通ありえないことです。

まして、最後に来た人から先に賃金が払われたのです。

おかしい話だと思いませんか。朝から働いていた人にとっては8~10デナリオンもらわないと割があわないと思います。ですから「まる一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」(マタイ 20:12) という労働者の言い分はよくよく理解出来ます。

理解出来ないのは主人の真意です。そんな時に聖歌 527 番の背景にある事件の事を知り、心に響いてきた箇所があります。

「何もしないで一日中広場に立っている人々」の存在です。主人の眼差しは彼らに明らかに向けられているのです。なぜなのだろうかと考えました。

私はこう思いました。何もしないで一日中広場に立っていたのは、何も出来ずに、全く動けなくて助けを求めていたけれども誰にもいやしてもらえない人々のことをさしているのではないかと思ったのです。不条理な事件によって突然、人々の社会(広場)から全く外れざるうえない状況に追い込まれてしまった人々が私たちの社会には確実に今存在しています。私たちもいつその状況の当事者になるのかは誰もそんなことは望まないけれども分からないのです。そして、もしそのような不条理の中に置かれてしまったらその中から本当に救い出すことが出来るのは人間の常識をはるかに越えた神様の恵みしかないのではないかと思いました。527 番の歌詞を読めば読むほどそう思えてくるのです。

私たちがどこで聖書を読むか、その立ち位置、また置かれている状況によって響き方は大きく変わってくるのではないかと思います。私自身は少なくとも今は大きく変わってきました。ぶどう園の労働者のたとえにおいて最も神の国へ近い存在として招かれている「広場」から動けない人への深い深い主人、つまり神様の眼差しに私たちは気づくことが出来たときに本日の福音書は、理解不能な話から福音、良き知らせとなって響いてくるのではないのでしょうか。